

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

「父の娘」に書くことは可能か  
—アシア・ジェバールにおける「父」と書く娘—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武内, 旬子, TAKEUCHI, Junko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2404">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2404</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「父の娘」に書くことは可能か  
—アジア・ジェバールにおける「父」と書く娘—

武内 旬子

神戸外大論叢 第68巻 第2号 (2018年) 抜刷

神戸市外国語大学 研究会

# 「父の娘」に書くことは可能か

## —アジア・ジェバールにおける「父」と書く娘—

武内 旬子

「語るという行為には、語るまいとする衝動が混入しうるのである。」  
安部公彦 『善意と悪意の英文学史』

### はじめに

2015年2月、78歳のアジア・ジェバールが活動拠点であったパリで亡くなった時、故人の遺志で父の傍らに葬られることになる、という報道があった<sup>1</sup>。書面か口頭か、実際にどのような形でその「遺志」が伝えられていたのかわからないが、パリではなく出身地（アルジェリアのシェルシェル）に、というだけでなく「父の傍らに」という何らかの「念押し」があったのだろうか。それとも、アルジェリアのメディアによる報道なので、出身地に戻るということを強調するための表現だったのか<sup>2</sup>。実証できる根拠もなしに推測することにはどれほどの意味があるかはさておき、母に先立ち父を追うことになった<sup>3</sup>作家の残した作品群において、「父」が無視できないテーマの一つであることだけは確かである。筆者はこれまでも、父に与えられたフランス語という言語で書くこと、相続権なき娘としての作家、などの視点からジェバールのテキストを分析してきたが、ここで改めて、ジェバール作品における父と娘の関係を取り上

<sup>1</sup> C.f. *El Watan*, le 7 février 2015.

<http://www.elwatan.com/archives/rubrique.php?ed=2015-02-07&rub=ew:w:une:culture> 管見では「父の傍らに」という表現が見られるのは、アルジェリアで発行されているこの *El Watan* 紙のみ。その他のメディアでは、出身地シェルシェルに埋葬されるという報道はあっても特に作家の父に関する記述はない。

<sup>2</sup> 上記 *El Watan* 紙では、「父の傍らに」に後に、「乳児期に亡くなった弟の傍らに」という表現が続いている。従って、「父」のみをことさらに強調しているというよりは、親族の眠る故郷の墓地に、というニュアンスで書かれたと考えるのが妥当であろう。

<sup>3</sup> ジェバールの父は1995年に死去。

げたい。書くことの意味というどの作家にとっても最重要のテーマが、ジェバールにおいては、「父—娘関係」のテーマと切っても切れない関係にあると考えられるからである。

作家の死によって、生前発表された作品として最後のものとなったのも『父の家に居場所もなく<sup>4</sup>』というタイトルのテキストである。ここでは、先行する自伝的作品の一部が取り込まれ、書き換えられている。多くの語り手が交替し、アルジェリアの歴史なども含む先行作品に対し、この小説では「私」一人が主として自らの経験を語る。リセの寄宿舎での生活や、「恋人」とのデートなど、ここで初めて語られる内容もある。

また、ジェバールにおける父—娘関係を考察するためには、自伝的要素の強いこの『父の家に居場所もなく』に加え、もう一つ、イスラーム世界で最も有名な「父—娘」（預言者ムハンマドとその娘ファーティマ<sup>5</sup>）を語る『メディナを遠く離れて<sup>6</sup>』を取り上げなければならない。「父」の死の場面から始まる『メディナを遠く離れて』は、ムハンマドの死前後の黎明期イスラーム共同体を、その発展よりは混乱の側面を、何より女性たちに焦点をあてて語る。ファーティマやアーイシャといったイスラーム文化圏以外でも名を知られた人々のみならず、敵方をも含めてムハンマドの周囲にいた様々な立場の女性たちが、語り手としてまた、登場人物として、入れ替わり立ち替わり現れる。序文において作家は、公的伝承の穴（女性たちの事績）を補うにはフィクションが必要だと言うのだが、こうして想像された女性たちの語りは、総体として、ムハンマド伝承の複数性自体を表現することになる<sup>7</sup>。

本論では、この二作を中心に、他の「自伝的」とされるテキストも視野に収めつつ、父に愛され、しかし相続権を奪われた、矛盾した存在としての娘という視点から、この関係の書かれ方を分析する。そして、結果的に作者の死によって生前出版最後となってしまったテキストが持つ特異な「終わり方」を、この父—娘のテーマと関連づけて読み解くことを試みたい。ジェバールは早くから自伝的四部作を書くとして述べていた。『父の家に居場所もなく』を読む者は、作

<sup>4</sup> Assia Djébar, *Nulle part dans la maison de mon père*, Fayard, 2007.

<sup>5</sup> なお、ジェバールの本名 (Fatima Zohra Imalhayène) も Fatima (Fatma と表記されることもある) という名を含む。

<sup>6</sup> Ibid., *Loin de Médine*, Albin Michel, 1991.

<sup>7</sup> Zineb Ali-Benali は『メディナを遠く離れて』を論じた2008年の論考において、「ジェバールはこの20年、フランスによるアルジェリア征服開始と、イスラーム共同体の端緒という始原を問い直しつつ、非常に間テクスト性の高いエクリチュールを実践してきた」と述べ、「(この二つの開始点が)女性たちにある運命を与えることになった」と指摘している。c.f. Zineb Ali-Benali, « Écrire en palimpseste : *Loin de Médine*, aux sources de la première fracture », in sld. N.Redouane et Y. Bénayoun-Szmidt, *Assia Djébar*, L'Harmattan, 2008, pp.201-202.

家がそれと認めた先行する三作<sup>8</sup>に比べても際だって自伝的という印象を持ちつつこれを読むだろう。ところがそのテキストは最終部に近づくにつれ、あたかも終わりあぐねるかのよう、堂々巡りを始める。そして、後書きに至って、自伝的四部作の締めくくりどころか、これは自伝的エクリチュールを準備するための第一歩にすぎないという言葉が現れて読者を啞然とさせる。この小説の執筆から亡くなるまで8年ほどあるため、今後、その間に書かれた何らかのテキストが公表される可能性もある。その意味で本論の解釈は、暫定的であることをまぬがれない。あくまで2017年時点で公開されたテキストのみを対象にした読みの試みであることをお断りしておきたい。

主に取り上げる二作品は、本論のテーマから見て、タイトルがすでに暗示に富んでいる。『メディナを遠く離れて』では、序文に、この表現についての解説的言及がある。

「《メディナを遠く離れて》動く女たち、すなわち、起源の光から不可逆的にそれていく一時的権力の場の、地理的、象徴的外部で<sup>9</sup>」

ここで「一時的権力」と呼ばれているのは、神あるいは天上の永遠の権力に対する、人間的地上的権力である。また「起源の光」はファーティマにとっては父でもある預言者ムハンマドの存在、あるいはその言動や教えであると考えられる。メディナは、父の場であると同時に、ムハンマドある限り真正の地上的権力の座する場だったが、彼の死後、後継のイスラーム社会あるいはそれを導く権力が変質していく場となる。その後継権力と対立する娘は、父の場から排除される存在である。『父の家に居場所もなく』の方は、文字通り、自らの父の家に正当な居場所を持たない、そこから排除された存在としての「私」を示唆する（原題は「私の父の家」という一人称単数の所有形容詞を含んだ表現になっている）。ジェバルの作品のタイトルで、一人称を含むのは、エッセイ集（『私を包囲するこの声たち<sup>10</sup>』を除いてこれ一つである<sup>11</sup>。後述するように「自伝」性の問題は慎重に検討する必要があるが、語り手が一人称単数でほぼ一貫し<sup>12</sup>、タイトルに一人称を含むことは、この小説（表紙と扉ページに小説と明示されている）の「自伝的」性質を強く暗示する。しかも、その一人称が「父」と深

<sup>8</sup> Ibid., *L'amour, la fantasia*, J.-C. Lattès, 1985; *Ombre sultane*, J.-C. Lattès, 1987; *Vaste est la prison*, Albin Michel, 1995.

<sup>9</sup> Ibid., *Loin de Médine*, p.5. 以下、*Loin de Médine* からの引用は、末尾に「LM (数字)」の形式で示す。

<sup>10</sup> Ibid., *Ces voix qui m'assiègent*, Albin Michel, 1999.

<sup>11</sup> なお、どちらも、主語ではなく、所有形容詞か補語人称代名詞の形である。

<sup>12</sup> 全406ページのうち20ページをしめるエピローグの一部においては、書き手を指示すると思われる一人称「私」、二人称「あなた」、三人称「彼女」の主語が混在する。またその最終部分の6ページは二人称単数「あなた」(tu)のみが主語である。

く関わる点に注目していきたい。

第1章で『メディナを遠く離れて』、第2章で『父の家に居場所もなく』における、父に愛された存在としての娘の書かれ方、及びその娘と言葉との関係を検討する。第3章では両作品における相続権なき存在としての娘を分析し、第4章において『父の家に居場所もなく』の終わり方の問題、あるいは「終わりの欠如」を、父と、書く存在としての娘との関係という視点から考察していく。

## 1 娘というポジション — 二人の娘、二人の父

### 1. 1 娘は書記になれない

『メディナを遠く離れて』には、夥しい数の女性登場人物が存在し、18の章<sup>13</sup>の題名も、それぞれ一人の女性を特定する呼び名なのだが、そのうちの一つが「愛された娘 (LM57)」である。周知のように、ムハンマドの子供のうち成人したのは娘のみ、またそのうち父の死の時点で生存していたのは四女ファーティマのみだった。「愛された娘」と題された章はこのファーティマを語る<sup>14</sup>。彼女は文中、章題同様「愛された娘 (LM58)」とも、「最も愛された娘 (LM58)」や「父の娘 (LM60)」<sup>15</sup>とも呼ばれる。語り手は、彼女が父に愛されたことを繰り返し強調するのだが、その娘は決定的な欠陥を持っている。すなわち、息子ではないことである。

『メディナを遠く離れて』自体がムハンマドの死の場面から始まるのと同じく、「愛された娘」の章もファーティマの死から始まる。父、娘とも、その死という局面がクローズアップされるのである。小説冒頭、死に臨んだ父は、信者たちに伝えることを書き取らせるために「だれか — 書記、信者、打ち明け相手 (LM11)」を呼ぶよう命じるのだが、「ファーティマは娘だったので、メディナで死が近づいていた時、書記とはならなかった (LM59)」。この小説では、息子でないという「欠陥」を持つにもかかわらず、偉大な父に愛された娘であることが語られるわけだが、語り手は、「ファーティマを、これほどにも父の娘

<sup>13</sup> 巻末の登場人物一覧表を除く 305 ページは、「前書き」「プロローグ」「フェルマータ」「エピソード」と題された部分以外が 4 部 18 章に分かれる。各章の間にはさらに「最初の語り手」「二番目の語り手」「三番目の語り手」「声」などと題された部分があり、ジェバル作品に多い複雑な構造を持つ。断片的であると同時に、時系列的な意味では比較的短期間（ムハンマドの死の前後数年）の、一つの共同体の有様を語るという点では求心的な性質も備えている。

<sup>14</sup> 語り手は匿名で、『メディナを遠く離れて』全体の語り手と同じと見なしうる。

<sup>15</sup> 文字通りに訳すと「彼女の父の娘」となり、『父の家に居場所もなく』同様、所有形容詞のつく「父」。

であるとするのは、彼女を不完全なイスラーム教徒にしてしまうことにもならないだろうか (LM60-61)」と自問する。つまり、ファーティマを、神の思し召し (息子ではなく娘として生まれたこと) に逆らう存在として語ることにならないか、と。このためらいにもかかわらず、語り手はさらに、「ファーティマはなぜ、ハッサンとフセインの母となって初めて年代記に現れるのか (LM62)」と問う。イスラームの伝統的な伝承においてファーティマが意味を持つのは、ムハンマドのいとこでありまた養子でもあるアリーと結婚して2人の息子 (ハッサンとフセイン) を産んだからこそである。自分が息子になれなかったかわりに、間接的に、父に息子を与えたというわけだ。Beida Chikhi によれば、「このシナリオは性転換の欲望に養われている<sup>16)</sup>」のみならず、「秩序攪乱を引き起こしかねない<sup>17)</sup>」。語り手は、息子の母としてしか語られないのは、「これほどの強さで実践される孝心は、情念と同じように、自発的な引きこもり、暗い夢、沈黙の動きに出会う (LM62)」からではないかと言う。父に対する孝心と情念 (passion) とが同列におかれるところまでこの語りは行くのである。

父と娘の「愛」の描写が、さらに具体的、身体的になされる箇所も注目になる。ムハンマドの死の数日あるいは数週間前の出来事としてアーイシャが伝えるところによると、アーイシャの部屋で病床にある預言者のもとをファーティマが訪れる。遠慮して少し離れた場所にいたアーイシャは、ムハンマドがささやく何かを聞いて娘が涙にくれた後、さらに何事かが父の口から語られた時、彼女の表情が一変、「喜びが晴れ間のようにやってきて、この愛する二人を変貌させる (LM62)」のを目撃する。預言者の死後のある日、この変化の理由をアーイシャに尋ねられたファーティマは、最初、ムハンマドがまもなく死ぬことを伝え、その後、「親族全ての中で、彼の後に続くのは、しかもすぐ後に続くのは私だと明かした (LM63)」からだと答える。愛する二人<sup>18)</sup>とも呼ばれる「父と娘は涙の中で、次いで、いわば突然の幸福のしたたかりの中で、完全に溶け合う (LK62)」。孝心と情念、近親相姦的欲望の存在をも示唆する表現だが、二人が「溶け合う」ことができるのは死によってのみ。悲しみと喜び、悲嘆と歓喜、エロスとタナトスの絡み合うこの場面から、特権的な妻であったアーイシャは排除されると同時に、それに抗いがたく引きつけられる。

<sup>16)</sup> Beida Chikhi, *Assia Djebar, Histoires et fantaisies*, Presse de l'Université Paris-Sorbonne, 2007, p.97.

<sup>17)</sup> *ibid.*

<sup>18)</sup> 原文では “deux êtres aimants”。

## 1. 2 娘は語り手になる

すでに指摘したように、『メディナを遠く離れて』は、ムハンマドの死の場面から始まるが、これは言い換えれば、アーイシャの場面から始まるということでもある。預言者は彼女の胸に抱かれて死に臨むのだから。そして、小説の、エピローグを除いた本編の最終章（2ページの「声」と題された短い文章が続くものの、それを除いた、章題を持つ最後の章）も、アーイシャを中心にした内容である。「生きた声を守る女(LM288)」と直訳できる章題は、生きた声(*parole vive*)、すなわち肉声で預言者をめぐろできごとの記憶を伝える者としてアーイシャを定義している。周知のようにアーイシャは、幼くしてムハンマドに見初められ、9歳ほどの年齢で彼と結婚し、妻たち<sup>19</sup>の中で最も愛された女性であるとされている。預言者の死後「権力は、突然、妻と娘の間で揺らぐ(LM280)」という事態の中で語られるファーティマとアーイシャの対立については、後述(第3章)するが、この妻は、預言者の娘に劣らず、愛された娘でもあった。

アーイシャの父アブー・バクルはムハンマドの古い友人と言われ、最初期の帰依者の一人である。ムハンマドの死後、イスラーム共同体の指導を引き継ぎ、初代正統カリフに選出された。「アーイシャが、とりわけその優しさと寛大さを知っていた父は、どのようにして、決断力に富み、厳しい口調の、疲れを知らない強靭さを備えた政治家に変わるのか(LM292)」と語り手は問うが、変わるのは父だけではない。この父に愛された娘も、「父の後ろで、また父の正面で、自分の政治教育を始める(LM292)」。語り手はしかし、アーイシャを「政治家」と見るのではない。「彼女は、つまり、最初の *rawiyates* なのか(LM292)」と問いかける。テキスト中、“*rawiya*”はアラブ語の音をイタリック体で表記する形で何度も現れる<sup>20</sup>。序文の脚注に「*Rawiya*: *rawi* の女性形、すなわち預言者と教友<sup>21</sup>の生を伝える者(LM5)」という解説がなされている。小説全体が、「～する、あるいは～の女性」という形式の章題をもつ部分と、「声」と題された部分が規則的に交替して構成されているのだが、「声」のテキストは全体がイタリックで印刷され、うち3つが、「声」のかわりに「第一の *rawiya*」「第二の *rawiya*」「第三の *rawiya*」と題されている。アーイシャを最初の *rawiya* とみなすかのような語り手の問いかけは<sup>22</sup>、テキストの最後に近い箇所に出てくる。先行する

<sup>19</sup> ムハンマドは最初の妻が亡くなるまでは一夫一婦にとどまったが、その後次々と妻を娶り、死の時点で8人の妻、及び結婚はしていない同棲相手が一人いた。

<sup>20</sup> ただし、上記292ページの引用ではイタリック体ではない。

<sup>21</sup> 最初期に帰依し、予言者と行動を共にしたイスラーム教徒。

<sup>22</sup> 「彼女は、つまり、最初の *rawiyates* なのか(LM292)」という文は疑問形をとっている。さらにその直前には、「彼女が、偶然のように最初の語りを始めたのは、寡婦となって2年目なのか(LM292)」という疑問文もある。断定を避けるこのような疑問形がこの小説では多用される。よ



第一の *rawiya* はアーイシャではない。この小説の全体が、ムハンマドをめぐる多声の語り、とりわけ、伝統的伝承から抜け落ちてきた女性たちの視点と声による語りをめざす。その中では、預言者との関係から鑑みて特別な立場にあるアーイシャとて唯一の声にはなり得ない。ジェバールの小説においては、彼女は、預言者の妻にして初代カリフの娘であるという歴史的事実によってのみ重視されるのではない。なによりも、夫の死後、徐々に語り手として育っていく存在として重要性を与えられているように思われる。

ファーティマは父に息子を与えることができた。一方、アーイシャはムハンマドとの間に子をなすことはなかった。また彼の死後、その妻たちには再婚が禁じられたこともあり、アーイシャは身体的に母となることはなかった。しかし、イスラームの伝統の中で彼女は「信徒たちの母」と呼ばれている。『メディナを遠く離れて』という小説は、あくまでフィクションの形を通して、アーイシャの語り手としての仕事、口頭の「生きた言葉」を通して、記憶を後世に伝える仕事こそが、彼女をしてイスラーム共同体を育てていく「母」とするのだと主張する。書記とはなりえなかったが、父のすぐ後に続いたファーティマと、語り手として成長していったアーイシャ。また、後述するように、この小説においてアーイシャは、ムハンマドのみならず彼の死後のファーティマに関する語りにおいても重要な役割を果たすことになる。

## 2 娘が読み、書く

「ある秋の朝、父親と手をつないで、初めて学校へ行くアラブ人の少女<sup>23</sup>」、この一文は『愛、ファンタジア』の有名な出だしであり、様々な場所で引用されてきた。幼い少女とその父はアラブ人だが、父が娘を導いて行く先はフランス語による教育を施す学校であることがすぐ後に判明する。父はその学校の教師でもある。父によって教育へと導かれる娘。ただし、それは、娘を他者の言葉、植民地支配者の言葉へと導くことでもあった。また、このシーンには母は登場しない。この時点では、フランス語の世界にいるのは父と娘のみである。

一方、『父の家に居場所もなく』の第1章は「若い母」と題され、『愛、ファンタジア』の冒頭よりさらに幼い娘（語り手の私）と母を描く。伝統的な白い

---

く知られた歴史上の人物や出来事、伝統的な伝承の中で信じられてきた内容に関わるだけに必要な慎重さとも考えられるが、それ以上に、イスラームの伝承において語られてこなかったことをあえて語るのだというジェバールの意思表示として読めるのではないだろうか。

<sup>23</sup> Assia Djebar, *L'Amour, la fantasia*, Albin Michel 版使用, 1995, p.11.

布で全身を覆った母と手をつないで道を行く「私」は母の傍らに在ることを「とても誇りに思う<sup>24</sup>」。ジェバールがこの二作品を「自伝的」と見なし、内容にも二作品には共通要素が多いことを踏まえるなら、冒頭の少女を、同一登場人物と考えることができる。ここからは、一人のアラブ人少女を取り巻く構図を読み取れるだろう。少女は、父と母、男性と女性、家の外と内、そして何よりフランス語とアラブ語という際だって二項対立的状況におかれているのである。これは植民地に典型的な構図でもある。ファーティマやアーイシャの生きた時代と異なり、ジェバールの時代には女性もアラブ語の書記能力がないわけではなく、自伝的作品に描かれる母は、たとえば、伝統的なアラブ語の歌の歌詞を書き留めていたりする。ただ、男性にはあった系統的学校教育を女性は受けていない。ジェバールの少女は、母の言葉（アラブ口語）ではなく、もっぱら父の言葉（フランス語）によって読み、書く存在となるのである。

父からフランス語を与えられることによって娘はまず、読む存在として描かれるのだが、そこからも母は排除されている。学校図書館から借りてきた本（エクトール・マロの『家なき子』）を夢中になって読み、涙を流している娘を見た母は、書かれた本を読んで泣くということ自体を今ひとつ理解できないでいる。彼女にとって感情を揺さぶるのは古くから伝わるアラブ語の歌だという一節がこのシーンに続き、一つの家庭に二つの言語、二つの文化が存在し、母と娘がそれを必ずしも共有できないでいる（対立しているのでもない）状況が示唆される。

父と共有する言語を巡っても、ちょっとした「行き違い」は存在した。当時の学校では、学年末に成績優秀者が表彰され、賞品として本が授与される慣習があった。小学校の1年目にして賞品の本を手にした語り手は、父がさぞ喜んでくれるだろうと期待に胸を躍らせ、隣の校庭（父の教える男子小学校と語り手の学ぶ女子小学校は校庭のフェンスで隔てられていた）にいた父に見せるべく走り出て本を振りかざす。ところが、父は「奇妙な半ば微笑みのような(NP31)」表情を見せるばかりなのだ。クラスで唯一のアラブ人である自分がトップになったというのに、アラブ人であることをあれほど誇りにしている父がなぜ喜んでくれないのか、娘はすっかり戸惑ってしまう。半ばコミカルに描かれるこのシーンには、しかし、政治的背景があり、語り手は後に理解したこととして、父の反応を解説している。賞品の本とはペタン元帥の伝記であり、共和派であった父は、フランスがナチスとペタンの支配下にあった当時、危険人物とすら

<sup>24</sup> Ibid., *Nulle part dans la maison de mon père*, p.15, 以下 *Nulle part dans la maison de mon père* からの引用は末尾に (NP 数字) の形式で示す。

見なされていた。その父は、たとえ我が娘の優秀さを証明するものであったとしても、ペタンの本を喜ぶ気にはなれなかったのだ。ここでは、ペタンと反ペタンという構図になっているが、その根底には、アラブ人の少女の優秀さを証するのが支配者の言葉であるという植民地状況が横たわっている。「原住民」の子供たちに教育を与えることでその状況を変える準備をするのが父の世代であるとすれば、その子供たちは支配者の言語を自分のものにした上で植民地状況自体を突破していこう。

その子供たちには、娘のみならず息子もいる。ジェバールの自伝的作品、特に『牢獄は広し』では、のちに独立運動に参加してフランスで投獄された弟と、息子に面会するために初めてフランスに渡る母が語られる。しかし、ここでも記述の中心は母にあり、興味深いことに、ジェバールのどの作品においても、父と息子との関係が書かれることはほとんどない。『父の家に居場所もなく』の語り手には、二人の弟がいる。上記の弟の他、乳児期に亡くなったすぐ下の弟である。この小説では、後者をめぐるエピソードが、父と娘の「共犯関係」を強化する契機として現れる。語り手の2歳ほど下の弟は、生後6ヶ月で亡くなるが、それ自体について詳しい記述はない。しかし、語り手が5歳になるかならないかのある日、両親の第3子にあたる次の弟が産まれてしばらくした頃、父が娘にフランス語で「(2年前に) 亡くなった弟については絶対に母に話してはいけない (NP75)」と言う。まだ5歳にもならない語り手に対し、父はあたかも大人に、「一人の女性に (NP73)」に語るように語りかける。語り手の解釈では、父のこの言葉は妻に対する思いやりや愛情を吐露したものに他ならない。「父に対して、私は、このように、言葉における腹心という役割を果たすことを始めるのだろうか (NP74)」と、自問する語り手は、フランス語を共有することによって父の「alter ego (腹心あるいはもう一人の自分)」の位置に自分を置く。エディプス的關係のこのバージョンでは、父と娘を結びつけ、母を排除するのは言語である。父の最後の言葉を書き留めることのできなかったファティマに比べ、ここでの娘は、父の言葉を最も近い位置にいて受け止めることが期待されている。そして娘は父の期待を裏切ることなく、優れたフランス語の使い手に育っていく。父と娘の關係に傷を付けるのは、むしろ父の方、ある日父の放った一つの言葉である。

「父の理想的イメージの中にある一つのやけど、一つの傷 (NP47)」と語り手が呼ぶものは、「入れ墨を入れたように (NP51)」に残り続ける。それは父が母に向けて言ったアラブ語の文のなかの二語「彼女 (語り手) の足 (NP49)」であった。語り手が4歳か5歳の時、当時住んでいた教員用住宅 (語り手の一家は、建物で唯一のアラブ人家族) の中庭で、あるフランス人教員の息子に助け

られつつ自転車に乗る練習をしていたところへ、父が帰って来る。父は、鋭く娘の名を呼び、共に家に入る。父の態度に普段と違う何かを感じて戸惑う語り手には何も言わず、彼は妻に向かってアラブ語で「私の娘には、自転車に乗って足を見せてほしくない (NP49)」と強い調子で繰り返す。Ernstpeter Ruhe は、この父の言葉は、「これまで彼女 (ジェバル) の記憶の奥底に隠されてきた<sup>25</sup>」のがこの作品で初めて表に出るのだと指摘している。幼い語り手には、父の怒りが理解できない。「私の足」の何が問題なのか。しかし、理解できなくとも、普段とは全く違う父の声の調子は、「私を汚し、引きつらせた (NP54)」。語り手の激しい動揺や「曰く言いがたい不快感 (NP57-58)」を、母もまた察することがなく、この言葉は、トラウマとして刻み込まれる。他のことでは何かにつけヨーロッパ人同僚をモデルとしていた開明的なはずの父が、「女たちに対する禁止の先祖伝来の裁判所に私を呼び出す (NP55)」。しかし、ここで問題になっているのは、他人の目だけではないだろう。中庭で自転車に乗るわずか5歳の少女の足が激しい反応を引き起こしたのは、父自身の持つ無意識の近親相姦的願望ゆえではないだろうか。語り手は、伝統的アルジェリア社会が父親に要求する、結婚まで娘の「不可視性を守る義務 (NP55)」を、「暗く卑猥な重荷 (NP55)」と表現する。父の近親相姦的願望については、すでに幾人かの研究者も指摘している<sup>26</sup>が、この表現にも、秘められた願望の暗示を読むことができるのではないか。また、Hervé Sanson は、父が「娘の足を、あたかも彼が、その、議論の余地無き所有者、受託者であるかのように隔離する<sup>27</sup>」と述べている。父によるこの象徴的切断が行われている以上、「娘はどうやって自分自身を完全に自らのものとしてできるだろう<sup>28</sup>」、娘に対するこの一種の「去勢」が、彼女が自分自身を所有すること、自分自身であることを妨げるというのである。こうした父に直面した語り手は、「私の父は同じ人物なのか、突然別人になってしまったのか (NP49)」と訝る。Sanson は父のこの突然の変貌を「彼女は「不気味なもの」の経験をする<sup>29</sup>」とフロイトの用語を用いて説明している。「自転車」と題されたこの章は第一部第5章という、小説全体では冒頭に近い場所におかれ、400ページを越えるテキストの10ページ程を占めているにすぎない。しかし、

<sup>25</sup> Ernstpeter Ruhe, « Enjambements et envols. Assia Djébar échographe », in éd. W.Asholt, M. Calle-Gruber et D.Combe, *Assia Djébar littérature et transmission*, Presse Sorbonne Nouvelle, 2010, p.44.

<sup>26</sup> c.f. Najiba Regaieg, « Autobiographie et auto-analyse dans *Nulle part dans la maison de mon père de Assia Djébar* », in Sylvie Camet et Noureddine Sabri éd., *Les Nouvelles écritures du Moi dans les littératures française et francophone*, L'Harmattan, 2012, p.139. Hervé Sanson, « Mon père, cet autre. Variations autour de la figure paternelle dans l'oeuvre d'Assia Djébar », in éd. W.Asholt, M. Calle-Gruber et D.Combe, ob.cit., p.326.

<sup>27</sup> Sanson, 2010, p.319.

<sup>28</sup> ibid.

<sup>29</sup> ibid., p.320.

「父が私に与えた唯一の傷 (NP51)」、あるいは父の「欲望」に対する娘の「応答」は、小説の後半全体を巻き込んでいく。本論の3章後半以降でこの問題を検討する。

### 3 娘は相続できない

イスラームが当時のアラブ社会にもたらした革新的できごとの一つは、娘に相続権を認めることであった。ジェバールの作品には、しかし、相続権を奪われた存在としての娘が、登場人物として、或いは語り手として現れ、この問題を焦点化する。本章では、父に愛されたはずの娘が、なぜ父の遺産を継げない者となるのか検討していきたい。

#### 3. 1 娘は何を相続するのか

『メディナを遠く離れて』には、ファーティマはこう言うことができたであろう、と語り手が、いうなれば彼女のかわりに語る一節がある<sup>30</sup>。

「娘や女たちにとってのイスラーム革命は、まず彼女たちに相続権を与えること、父から引き継いで当然のものを与えることだった！ムハンマドの仲介でアラブ人たちの歴史上初めて導入された！（LM79）」。

この表現を引き出すことになったのは、ムハンマドの死後、初代カリフとなったアブー・バクル（アーイシャの父）が、預言者の生前の言葉をたてにファーティマに一切の遺産相続を拒否したという事情なのだが、この一件を語る章（「メディナで否と言う女」）は、小説中、最も重要な章の一つであると思われる。ここで語られる「否 (Non)」には二つあり、前半はムハンマド、後半はファーティマによる「否」である。前半のエピソードは、ムハンマドがいかに娘を愛していたかの証しであり、後半に描かれる娘の怒りや嘆きを際立たせる役目も担っている。

「それはまず父、愛された娘の父であった、(中略)メディナで最初に否と言ったのは彼だった (LM68)」という文から始まるこの章の前半は、ファーティマの夫アリーが、二人目の妻を娶ろうとしたエピソードを語る。すでにムハンマドには、イスラーム教徒の男性は、一定の条件を満たすなら4人まで妻を持つことができるという啓示が下されていた。アリーの希望は、その点では問題

<sup>30</sup> 条件法現在を用いて「彼女(ファーティマ)はこう言うこともできるだろう (elle pourrait dire :)」という表現に引用部分が続く。

がないはずだった。しかし、他人の噂からアリーの意向を知って衝撃を受けたファーティマは父に訴える。預言者は、神が許したものを禁止はしないという一方、ことアリーに関しては、二人目の妻を娶るにはファーティマと離婚しなければならないと断言する。「なぜなら、私の娘は私の一部だからだ。彼女を苦しめるものは私をも苦しめる。彼女を動揺させるものは私をも動揺させる！（LM74）」というのがその理由である。語り手は、「あれから14世紀たつ。少なくともイスラーム共同体において、娘の平穩のために立ち上がり、それをこれほど熱く守ろうとした父はいないように思われる（LM68-69）」と、娘の守り手としての父を強調する。「この日メディナで、ムハンマドはだれに対して「否」と言ったのか（LM75）」という疑問文が畳みかけるように3回繰り返され、それぞれ異なった答え<sup>31</sup>が与えられる。しかも、その答えには毎回疑問符が付くのだが、その過程を通して、ムハンマドの中で、預言者と父の間の葛藤が高まっていく様が表現される。そして、最終的に、娘を我が身の一部とする父が優位に立つことになる。

章の後半、今度は、ここまで父に愛されたファーティマが、ムハンマド亡き後のイスラーム共同体をなす人々に向かって、とりわけ、アブー・バクルをはじめとする指導者層の人々に向かって断固たる「否」を突きつける。ムハンマド死後の後継者をめぐる権力闘争には、実際には様々な要因があったと思われるが、この小説においては、その状況が、あくまで娘ファーティマに焦点を定めた形で描かれる。

親族がムハンマドの死を悼み、弔いの準備をしていた間に、彼らを排除した形で、アブー・バクルが初代カリフになることなど、様々な決定がなされたとされる。これはとりわけ、ファーティマの夫アリーの、アブー・バクルに対する忠誠の誓いの拒否を引き起こし、後のスンナ派とシーア派との戦争に至る抗争の発端ともなる。共同体内部の亀裂が露わになる中、ファーティマが問題にするのは、娘としての相続である。上述のように、ムハンマドは娘に相続権をもたらしたのだが、アブー・バクルは、生前預言者が彼に、「我々預言者たちからは、誰も相続しない。私たちに与えられたものは、賜物なのだ（LM79）」と言うのを聞いたとして、ファーティマが相続することを認めない。一方、彼女にとっては、わずかばかりの所有地や財産が問題なのではない。娘が相続するという事実が持つ、象徴的意味こそが重要なのだ。しかし、アブー・バクルは、ファーティマが自分にとって、「実の娘アーイシャ以上に大切なもの（LM83）」

<sup>31</sup> 「アリーに、いとこで、娘婿で、養子であるアリーに？（LM75）」「メディナの人々に、彼に耳を傾ける人々に？（LM75）」「自分自身の一部に？（LM75）」

だと言いつつも、預言者の言葉に厳格に従うとして、その相続権を否定する。Fatma Haddad-Chamakh は、『メディナを遠く離れて』においては、「メディナの男たちの冷たく厳しい性格や粗野なふるまい<sup>32</sup>」と「娘や妻たち、教友たちに対してやさしく思いやりにあふれた男としての預言者像」が際立ったコントラストをなすことを指摘している。

ところで、たとえば Sabah Sellah は、このファーティマの抗議について、「反抗の叫びの中でファーティマは共同体の人々に向かって、女たちはもう、従属的で下女的な役割に従うことを望んでいないとはっきり言わんとするのだ。女たちは、彼女らに割り当てられた伝統的表象を変えたいと望む<sup>33</sup>」と解釈し、ファーティマをあたかも女性たちの代表者、代弁者とみなしているように思われる。しかし、ここでファーティマは、父の娘である自分以外の女性一般、抑圧され従属的地位にある女性たちの代表者として書かれているだろうか。たしかに、父ムハンマドが認めた画期的な娘の相続権は、彼女一人ではなく、女性一般に関わるものである。上に引用した箇所からもわかるように、その歴史的意義にジェバルが注目しているのは確かである。しかし、ファーティマの抗議の場面の核心にあるのは、女性代表としての主張ではないと思われる。そもそも、ここで、「犠牲者」としてクローズアップされているのは、女性一般ではなく、ファーティマ自身であり、むしろ女性一般に認められた相続権を自分一人が奪われることへの反発なのである。

ここで注目すべきは、ファーティマの抗議が、その内容以上に形式を重要して描かれていることではないだろうか。彼女は、言葉のパフォーマンスによって人々に強く訴える。初代カリフ始め、多くの信徒たちを前に彼女が行う抗議は、即興の「韻を踏んだ非難 (LM80)」であり、テキスト中、イタリック体の分かち書きで印刷される。すでに、父の死に際しても、ファーティマは即興の哀歌を響かせているのだが、ここでは「熟練の悲劇女優 (LM81)」のように感情をコントロールして言葉を紡ぐ<sup>34</sup>。父ムハンマドの功績を称えた後、

「あなた方は知ることになった、そう、これほどの人間を、  
そして、それは私の父、私の父であって、あなた方の父ではないことを  
どうして認められないであろうか！  
私の父であるばかりでなく、私のいとこの兄弟でもあることを！

<sup>32</sup> Fatma Haddad-Chamakh, « Les figures de Mohammed, Prophète de l'islam, dans l'œuvre littéraire d'Assia Djebar », in éd. W.Asholt, M. Calla-Gruber et D.Combe, 2010, p.303.

<sup>33</sup> Sabah Sellah, « L'amour filial dans *Loïn de Médine*, d'Assia Djebar, in sld.N.Redouane, *Les écrivains maghrébains francophones et l'Islam. Constance dans la diversité*, L'Harmattan, 2013, p.207.

<sup>34</sup> ジェバルは、他の作品においても、アラブ語世界において、様々な機会に朗読される即興詩の重要性に言及している。

(LM80)」

と、親族関係を強調する。彼がいなければ、あなた方は地獄の縁にいるところだろうと述べた後、

「そして今日、そのあなた方に傷つけられるのを、私たちは耐えなければならぬのか？

あなた方は、私たちの喉をよぎる刃のようなもの、

なぜなら、私たちは何も相続できないと言い張るのだから！

ムジャーヒディーン<sup>35</sup>と呼ばれるあなた方、そのあなた方が私に押しつけようとするのは、ジャーヒリーヤ<sup>36</sup>の法！（LM81）」

2 ページ、数節に渡って続く即興詩の朗読の間には、聴衆の動揺も書き込まれる。これ以降、血縁者を排除して成立した後継権力の正当性には、常に疑問符がつきまとうことになるだろう。

「このように彼女は「否」と言った、愛された娘は。

初代カリフに「否」と、預言者の「言葉」の文字通りの解釈に対して、これからは、彼女を「愛された娘」ではなく、「相続権を奪われた娘」と呼ばなければならないのだろうか（LM85）」

と、語り手は問う。しかし、娘は、父から何も受け継がなかったわけではない。初代カリフや彼を支える人々が奪うことのできなかった「遺産」がある。それが「言葉」なのだ。

「彼女（ファーティマ）について、後にアーイシャは言うだろう、彼女は、愛された預言者に、「その言葉によって」最も似ている、と（LM79-80）。」

ジェバルは、『メディナを遠く離れて』において、父の言葉を継ぐ者として娘を位置づける。もちろん、預言者としてではない。言葉によって人々に訴えかけ、心を動かす能力において、である。ただし、ファーティマは、彼女を聞く人々に感銘を与えはしたが、象徴的な娘の相続権を得ることには失敗する。その意味では、やはり、相続権を奪われた存在なのである。

### 3. 2 ファーティマから遠く離れて

「兄弟たちに、叔父たちに、息子たちによってすら、事実上相続権を奪われてきた娘たちの果てしない行列の先頭（LM79）」にいるのがファーティマだと『メディナを遠く離れて』の語り手は言う。だとすれば、『父の家に居場所もな

<sup>35</sup> ジハード（聖戦と訳されるが必ずしも戦闘行為ではない。定まった目的のための努力を意味するアラブ語）に参加する戦士。なお、イタリック体で印刷された韻文中、この語と「ジャーヒリーヤ」の2語はイタリック体ではない。

<sup>36</sup> イスラーム以前のアラブ社会や時代を指す。もとは「無知」の意。



く』の「私」もまた、その行列に連なっているのだろうか。ファーティマは、相続権は認められずとも、父ムハンマドの「言葉」を引き継ぐとアーイシャは言う。では、父の導きで「言葉（フランス語）」を与えられ、読み書く存在となった20世紀の娘は、父の相続人となれるのだろうか。

『父の家に居場所もなく』には、先述のペタンの伝記をめぐるエピソードの直後、全体がイタリックで印刷され、《Intermède<sup>37</sup> (NP35)》と題された1ページのテキストがある。「私」の物語の流れとは少し離れた、「植民地」をめぐる思索的内容を持つ異質なページである。ここでは、「植民地とは何よりも、二つに分断された世界である (NP35)」と述べられている。「二つの世界」とは、植民地には、植民「以前」には何もなく、我々が無から全てを作り出したと主張するグループと、彼らに全てを破壊されてしまったグループの二つを指す。このページで注目すべきは、しかし、この二つのグループの共通性の指摘である。

「植民地とは相続人のいない、相続財産のない世界である。

(植民地の二つの世界の) どちらの側の子供たちも彼らの父の家には住まないだろう！彼らが皆先祖を持つとしたら、その先祖たちは彼らに、共有する恨み、よくても忘却しか残さないだろう、もっと多いのは出て行きたいという欲望、逃亡の、否認の欲望、黄昏の中、どこでもいいから逃げ去るための行き先を探す欲望しか残さないだろう・・・(NP35)」

侵略者も先住民も、支配者も被支配者も、後を継ぐはずの者は逃げ出すことしか望まない、植民地はそのような世界だと言うのだ。ファーティマは相続権の無いことを嘆いた。植民地の娘は、相続権の有無よりも、「父の家」を脱出することのみを願うのだろうか。『父の家に居場所もなく』は、このページの後、二つの世界のうち、過去を破壊された側の娘「私」の物語に集中するため、もう一つの側の子供たちの「相続」について展開は見られない。本論も、「私」を検討の中心にするため、もう一つの側については議論できないが、ジェバルという作家がこうした論点を提出していることについては、別に考える意義があることを指摘しておきたい。

さて、植民地の娘には、相続権以前に、そもそも相続すべきものがあるのだろうか。父が与えるのはフランス語という言語であり、それによる教育であった。上述のページで、植民地支配下のアルジェリアには、継ぐべきものが何も残されていないかのように書かれているとはいえ、他のページ、他の作品には作家ジェバルが「継ぐ」ことを願っていたと考えられるものがたしかに書き込まれている。女性たちの文化である。ただし、その全てがそのまま肯定され

<sup>37</sup> 間奏曲あるいは幕間の意。

るのではない。あくまで、20世紀後半に、植民地状態、独立戦争、独立後という絶え間ない変動を生きた娘の視点から見た女性たちの文化である。そして、その文化を生きることが自分にはできなかつたのではないか、という自問が、あるいはそれ以上の自責の念がジェバールにつきまとう。フランス語の学校教育が生み出す、同世代の女性たちとの間の距離は、すでに『愛、ファンタジア』にも現れるが、『父の家に居場所もなく』においては、「私」の持つ異質性の自覚と「父の娘」であるという自覚とが直接連結されている。母に連れられていった親戚宅で、伝統的な育てられ方をしていた同世代あるいは少し年上の少女たちが、「私」のフランス式の服装に羨望のまなざしを向け、いろいろとコメントするのだが、少女の一人が「うわさによるとこの子のお父さんは (NP17)」と言い出す。するとその文は中断され、「私は突然、自分が奇妙な存在、異邦人だと感じる (NP17)」。その後、親戚の少女が続けるのは、「私」の父が「私」に「フランス人の持っているような本物の人形 (NP17)」を買い与えているという話である。「この指摘によって私は突然不安を抱き、自分が「父の娘」であると感じる (NP18)」と言う語り手は、この直後「排除の一形式なのか、恩恵なのか (NP18)」という疑問形の文でこの章を終わっている。「父の娘」であることの特権と引き替えに、女性たちの世界から排除される。植民地の娘の「相続」はこうしたゆがみを伴う。

ミカエル・フェリエは、カテブ・ヤシンを論じる論考の中で、フランスの旧植民地出身作家による文学の中に繰り返し現れるモチーフがあり「あまりに執拗に出てくるので、人々の注意をひかずにはいない。それはフランス共和国の学校の体験の場面である<sup>38</sup>」と指摘している。そしてそれが、「トラウマと同時に幸運として、毀損と同時に好機として体験される<sup>39</sup>」というのだ。フェリエはここで例として7人の作家の名を列挙しているが、全員男性作家である。フェリエによれば、カテブがフランス式教育の学校に移された時、

「彼はすぐにこの新しい教育を好きになったことを隠さなかつた。それは、彼にその教育を施したのが「快活な女性教師」であったために、なおさらであった！ 異国の言語と文化のあらゆる魅力は、この女性によってもたらされたのだ。<sup>40</sup>」

ヨーロッパが植民地を「女」と見なすオリエンタリズムはよく言及されるが、

<sup>38</sup> ミカエル・フェリエ、「われわれは皆同じ場所にいる・・・ — カテブ・ヤシーヌ：文化の出会いの「原風景」、尾崎文太訳、三浦信孝編、『グローバル化と文化の横断』、中央大学出版、2008年、p.302.

<sup>39</sup> 同上。

<sup>40</sup> 同上、p.305.

「女」とみなされる側からも、宗主国—異国が「女」とみなされることもあり得る。女性化され、劣位に置かれた側の男性は、強者の「女」を「所有」することで「対抗」する<sup>41</sup>。

では、父の手に引かれてフランス語へと導かれた娘の場合はどうか。ジェバールのフィクションやエッセイには、父以外、教員はほとんど描かれず、性別は前景化されていない。(ただし、コレージュの校長や舎監、フランス語教師の一人は女性として描かれている。)フランス語は一貫して父の言葉である。ただ、第一作『渴き』において、ヒロインはアルジェリア人の父とフランス人の母との間に生まれ、フランス語が母語という設定になっている。この設定の持つ様々な意味についてはすでに別の場所で論じたが<sup>42</sup>、フランス語で書くアルジェリア人女性作家という困難な立ち位置は、最初からジェバールにとって最重要のテーマなのである。この作家の仕事は全て、受け取った(フランス語)或いは受け取り損ねた(アルジェリア女性の文化など)「遺産」をめぐる葛藤なのだと言うこともできよう。

ゆがみを伴いつつも、「私」の世代では特権であったフランス語による学校教育ではあるが、娘には全てを「読む」ことは許されていない。娘が読むことを許されない手紙については、すでに『愛、ファンタジア』でも語られているが、『父の家に居場所もなく』第三部には「引き裂かれた手紙」と題された章があり、1952年6月という日付も明示されている。父が、未知の人物から娘宛に届いた手紙を、「ひきつった顔(NP251)」で破り捨てる。「私」は、「父の怒りの激しさを前に呆然と(NP251)」するばかり。屑籠に捨てられた手紙を、後で娘はこっそり拾い集めてつなぎ合わせ、読む。それは、リセの終業式で彼女を見かけたという男子学生からの文通の申し込みだった。読む能力は父から引き継げるとしても、その「相続財産」の行使には限界がもうけられている。だが、同時に、ジェバールのテキストでは、娘は、その限界をかいくぐって父の禁止の向こう側へと出て行く。とりわけ、『父の家に居場所もなく』で明らかになるように、語り手は読むことを禁じられた手紙を読み、それに応答するのだが、この読み書き能力は、父に隠れた「交際」へと語り手を導くと同時に、父から相続できなかった言語へと彼女を導くことになる。

文通を申し込んできた男子学生タリクはアルジェでイスラーム法学を学んでいた。最初、彼の申し出に応じる決意をしたのは、父の自分に対する「不当な(NP255)」な行為(手紙を読むことを許さず破り捨てたこと)への反抗であり、

<sup>41</sup> このテーマについては拙論参照。「小説を書く権利 アシア・ジェバール初期小説を読む」、『神戸大論叢』、第54巻、第1号、2003年9月、pp.61-89。

<sup>42</sup> 同上。

同時に好奇心からだったと認める語り手は、彼が、アラブ語文学、とりわけイスラーム以前の詩を学んでいることを知るや、俄然興味を抱く。語り手は以前、コレージュで古典アラブ語を学びたいと要望したのだが、他に希望者がなく、一人のために講義は開けないと拒否され、断念していた。音の美しさ、複雑な韻の遊び、幾重にも重なった意味のおもしろさなど、フランス語訳からはこれらの詩の最も貴重な部分を受け取れないと考える語り手は「自分がアラブ語の孤児 (NP278)」だと感じていたのである。特権的な教育を受けてきたにもかかわらず、「父の満足にもかかわらず (NP278)」、自分が「それではと感ずる<sup>43</sup> (NP278)」と嘆く。本来通るべきだった道をそれているという感覚は、父の与える言葉と教育に成功を収めてきた優秀な娘の、父からは受け取れなかった遺産を受け取りたいという願望と表裏一体である。娘は父の禁止を侵犯するのだが、その欲望の対象は、父の禁じた男性自体というより、アラブ語、それも母や女性たちに世界の言葉である口語アラブ語ではなく、古典アラブ語という、本来相続すべき財産である。ここでタリクは、父に代わって娘に古典アラブ語という遺産を渡す役割を担うのである。現実には、母音を添える形で表記したアラブ語の詩を、タリクが語り手に書き送る程度の文通であり、このおかげで彼女の古典アラブ語が本格的に上達することはない。しかし、この小説で重要なのは、父の禁止を侵犯する原因となったタリクが、アラブ語を解する能力によって、「父」の位置に配置されることである。だが、娘に自分を「孤児」だと感じさせる父からの相続の欠如を、「父の代理」は充足することができるのだろうか。小説の最終部は、娘と書くこととの悲劇的な関係を露わにするだろう。

#### 4 娘は書き終わることができるか

##### 4. 1 回転するエクリチュール

『父の家に居場所もなく』という小説では、第3部第9章まで、おおよそ年代順に語り手「私」の「自伝」的物語が、内容、形式ともに大きな破綻なく続く。ところが、第3部の残り第10章、第11章、及びそれに続く「エピローグ」(3つの章に分かれる)、その後に来る「後書き (Postface)」、さらに「後書き」の末尾に置かれた執筆時期等の情報(「A.D. 2006-2007 ニューヨークーパリ (NP406)」)のそのまた後に印刷された4行の「追伸 (P.S.)」まで、全体で406

<sup>43</sup> 《Je sens que je suis passée à côté》

ページの小説のうち約 15% (66 ページ) にあたる部分は、それ以前の部分とは相当に様相を異にする。第 9 章まで「順調に」読んで来た読者は、目眩のするようなエクリチュールに巻き込まれ、そしてそのまま物理的にテキストは終わってしまう、とでも言うべきだろうか。作家の生前最後に発表された小説のこの「終わり方」は一体何を表しているのだろうか。

最終部 66 ページの最も顕著な特徴は「反復」である。あまりに繰り返しが多いので、エクリチュールが線状に続くのではなく回転しているかのような印象さえ与える。では、何が、どのように反復しているのだろうか。ここでは、レベルの異なる数種の反復が重なり合っている。まず、単語レベルで言えば、たとえば、「突然 (soudain)」という語が、第 10 章から追伸までの間に 30 回<sup>44</sup>現れる。この語自体は特殊な言葉でもなく、ジェバルの他の作品にも用いられている。しかし、白紙部分も多いこの 60 ページ余りに 30 回という頻度は、読む者の注意を引かずにはいない（とりわけ第 10 章とエピローグに集中する）。繊細な言語感覚や、練り上げられた複雑な構成を特徴とするジェバル作品において、この頻度は特異である。さらに特異なのは、文レベルでの反復である。幾つかのヴァリエントがあるが、「もし父に知られたら、自殺する」を基本形とする文が第 10 章 (20 ページ) で 10 回、第 11 章 (16 ページ) で 7 回繰り返される。エピローグにも 2 回現れる。これより頻度は低いが繰り返されるもう一つの文が、タイトルにもなっている「父の家に居場所がない」である。第 10 章で 2 回、第 11 章で 1 回、エピローグで 5 回現れる。同じ語や文を不用意に繰り返す作家ではないジェバルのテキストにあって、この反復は異常な現象だと言うことができよう。さらに、エピソードレベルにおいても、同じ一つの「行為」が繰り返し、繰り返し語られる。語り手自身、それを「行為 (acte)」と呼び、この単語自体も反復される。その「行為」(アルジェの街の高台から海に向かって階段状の街路を駆け下り、飛び出した大通りで、折しもそこにやってきた路面電車に飛び込む。そして間一髪で助かる) の語りに伴走するのが、上記の「もし父に知られたら、自殺する」という文である。「行為」は繰り返し具体的に描かれ、読者は、エンドレスフィルムを見ているかのような錯覚を覚える。一般にジェバル作品の終わりは「暗い」印象を与えるものが多いが、この終わり方はやはり特異であると言わざるを得ない。

#### 4. 2 「問題は父」

ところで、以上のような反復を引き起こす直接のきっかけは、比較的シンプ

<sup>44</sup> ヴァリエントとしての «soudainement» を 1 回含む。

ルな出来事である。前章でも言及したタリクという青年と語り手とのちょっとしたいさかい、「痴話喧嘩」なのだ。一家でアルジェに引っ越した語り手は、勉学を続けつつ、タリクとアルジェの街を歩き回るといふ家族に秘密の「デート」を重ねる。ある休日、カフェで落ち合っているものの散歩に行くつもりが、前日に偶然再会したリセ時代の同級生が強引にその待合場所に現れる。第9章では、語り手の視点から、その友人がいかにかタリクの気を引こうと画策するかが語られる。「三角関係」に陥って不愉快になった語り手は、これからタリクと自分はやることがあるので、とその友人に一方的に別れを告げ、タリクとの散歩を始める。ところがタリクはしばらく後、「あの友達を連れに戻ってここまで連れてこい、これは命令だ (NP339)」と語り手に言い放つ。この一言がきっかけになって、テキスト上、怒濤の「反復」を含む部分が始まるのだが、この台詞直後のパラグラフで唐突に「父」が問題になる。

「父なる神、ついでに私自身の父、二人がいっしょになって私にこんな命令を下すとしたら、私はノーという必要すらないだろう。ブロンズか鋼の壁が私の中にそそり立ち、私は絶対屈しないだろう (NP339)」

神と人間を峻別するイスラームの発想にはなじまない「父なる神」というキリスト教的表現を用いて、命令を下す者として「父」がテキストに召喚されるのだが、それも、その命令に従うべき相手ではなく断固拒否する相手としてである。神にも等しい父の命令でさえ、このような命令なら私は断固拒否する。タリクは自分を何様だと思っているのかと、その傲慢、タリク本人が意識していないらしい傲慢を語り手はこのような表現によって断罪するのである。しかし、それはまた、父とタリクを同列に置くことでもある。語り手は、タリクとの関係を努めて淡々と書いてきた。「婚約者」と括弧付きで名指しつつ、恋愛はおろか、感情的つながりすら希薄な、アルジェの街を自由に歩き回るための同伴者にすぎないかのように。すでにリセ時代の文通も、恋文とはほど遠く、アラブ語の詩を読むためだけに続いたかのように描かれていた。そのタリクとの諍いが、ただちに「自殺」を引き起こしても無理はないと読者を納得させるような記述はテキストには見当たらない。むしろこの淡々としたエクリチュールは、語り手がアルジェの街を駆け下りる「行為」を、あくまで予想もつかない突発事項なのだとして性格付けることに寄与する。そもそも問題はタリクではない、「最初から問題なのは父だったのだ (NP379)」。

しかし、「父」の何が問題なのか。「父」という単語も、この小説最終部でも頻繁に現れる語の一つに他ならない。「父に知られたら、自殺する」という文は、すでにタリクと街を歩き回っていた時にも現れている。

「10回、20回、彼と隣り合って歩いてきた街で、私はドキドキするよ

うなリスクを受け入れてきた。10回、20回、私は内心、熱狂的につぶやいていた、もし父がそれを知ったら、私は自殺する！と（NP348）。」

第10章以降、「行為」に伴走する時、この文は「この魔法の文、呪われた文（NP353）」とも「悲劇的な文、それともある意味では喜劇的な文（NP353）」とも形容される。この文は、繰り返される中で、文字通り訳せば「私は私を殺す<sup>45</sup>」となる後半部分が、「父が・・・私を殺す（NP354）<sup>46</sup>」へと変貌することさえある。若い女性が親族でない男性と街を歩き回ることをよしとしない時代の社会で<sup>47</sup>、父は、規範に外れた娘に対し「死刑判決を下す父（NP354）」でもあり得る。しかし語り手は、「父が私を彼の法廷に召喚しても、私は出廷しないだろう（NP370）」と決意した存在でもある。その代わり、自殺するというのだ。さらに、「父」は、厳しい裁判官であるだけではない。傲慢なタリクに対して語り手がぶつけるのもその「父」に他ならない。

「父は、私には誇りそのものに見えていた。あらゆる形態の障害物に対してそそり立つシルエット・・・あなた<sup>48</sup>があそこで振りかざしたのはこの父、この、輪郭のはっきりしない男の前であなた自身が父になったように感じるために振りかざしたのは（NP354）」。

父と自己同一化することによって娘は自己の尊厳を守る。父は娘を破壊するのではなく防波堤のように守るのである。

娘を愛する者、裁く者、守る者、父は矛盾した多くの役割を担う者として書き込まれている。そして、もう一つの重要な役割は、娘の欲望の対象であることだ。これは、他の役割と異なり、テキスト上、直接それと書かれることはない。しかし、父への欲望、自殺未遂、エクリチュールの反復と終わりのなさは、この小説において、切り離して考えることはできない。

#### 4. 3 書き終えられないもの

『父の家に居場所もなく』では、突然はじかれたように階段を駆け下りて電車に飛び込むという「行為」にはずっと、「父」がつきまどっている。この「行為」の描写は、しかし、この小説が初出ではない。ジェバールに「小説 (roman)」

<sup>45</sup> « je me tue »

<sup>46</sup> « Mon père ... me tue »

<sup>47</sup> あくまで小説の舞台として設定されている1950年代の状況。21世紀初頭の現在では、事情は異なっている。

<sup>48</sup> この文章は二人称で、語り手が登場人物としての「私」に語りかける形式になっている。「あなたは、あなた自身が父になるように感じるのか？」という疑問文。『父の家に居場所もなく』は、大半が、語り手と主人公が一致した一人称の語りによるテキストだが、特にこの終結部では、語り手が主人公に親称の二人称で語りかける部分、主人公が三人称で記述される部分が混じる。

と銘打たれた作品が『父の家に居場所もなく』を除いて11作ある中で、類似した「行為」の描写がそれ以前に3つ存在する(『待ちきれない人々』と『影 スルタン妃』では飛び込むのは車、『愛、ファンタジア』では路面電車<sup>49</sup>)。さらに、『父の家に居場所もなく』でこの疾走は飛翔にも例えられているが、高い場所から身を躍らせるという行為のみに注目するなら『ストラスブールの夜』は、語り手が大聖堂の塔の上から身を躍らせるらしいことが暗示されて終わっている<sup>50</sup>。また、駆け下りる行動抜きに車と接触するエピソードは『うぶなヒバリたち』にも見られる<sup>51</sup>。どの場合も、「行為」の突発性が際立つ。

Anne Donadey は、『父の家に居場所もなく』は「喪の本<sup>52</sup>」であると言う。この小説中で語られる死として彼女が列挙するのは、父方の祖母の死、すぐ下の弟の死、父の死、そして語り手の自殺未遂である。父方の祖母の死の場面は第1部第2章にあり、祖母自体より、その死を知った語り手の、号泣しながら坂道を駆け下りる行為に照準を合わせた記述になっている。この、駆け下りるといふ行為は、小説後半の「行為」の予告としても読める(ただし、第2章では駆け下りるだけで「自殺未遂」的要素はない。一方、最終部では、駆け下りる語り手は泣いてはいない)。弟の死は第1部第7章だが、そこで焦点化されるのは、その死を語ることを禁じる父の命令である。本論第2章で述べたように、語り手には、すぐ下に弟が生まれたのだが、その弟は生後数ヶ月で突然死する。語り手は幼すぎたため、弟についてほとんど記憶がないのだが、父の「おかあさんの前で死んだ弟のことは絶対に話してはだめだ、絶対に(NP75)」という禁止命令だけはテキストに書き込まれる(少し形をかえて3回)。父と、語ってはならないという命令はここで固く結びつく。「父の死」に関しては、『メディナを遠く離れて』の場合と異なり、それ自体が中心となる語りは見られない。第1部第8章でクローズアップされるのは、語り手の母の嘆きである。『父の家に居場所もなく』では、当時のアルジェリアでは珍しかったとジェバルの言う夫婦間の愛が強調されていることを考えると、ここで嘆くのは何よりもまず「父が愛した女性」に他ならず、テキストはその語り手の嘆きよりもこの女性のそれを焦点化している。「喪の本」にも、父の死はこれ以上書き込むことがで

<sup>49</sup> c.f. Assia Djébar, *Les Impatients*, Julliard, 1958, p.94, *L'amour, la fantasia*, J.-C. Lattès, 1985, Albin Michel, 1995, p.130, *Ombre sultane*, J.-C. Lattès, 1987, p.168.

<sup>50</sup> Djébar, *Les nuits de Strasbourg*, Actes Sud, 1997. この小説でヒロインは、父親ほどの年齢の男性と性的関係を持つ。その関係は彼女の方から断ち切られ、最終部で大聖堂からの「飛翔」が暗示される。以下の拙論参照。「場違いな物語 — アシア・ジェバル『ストラスブールの夜』における虚空とエクリチュール —」、『神戸外大論叢』、第61巻、第1号、2001年11月。

<sup>51</sup> Djébar, *Les alouettes naïves*, Julliard, 1967, Actes Sud, 1997, p.383.

<sup>52</sup> Anne Donadey, « L'expression littéraire de la transmission du traumatisme dans *La femme sans sépulture*, d'Assia Djébar », in éd. W.Asholt, M. Calle-Gruber et D.Combe, 2010, p.77.



きないということだろうか。石川美子の自伝文学研究『自伝の時間<sup>53</sup>』によれば、愛する者の死を受け入れられないまま書き出される自伝は、その死を書くはずの箇所では何らかの形で破綻するという。この意味で、終わりあぐねる『父の家に居場所もなく』は、父の喪の作業が未完了であることの印かもしれない。だが、この小説の終わり方については、上記の「行為」、あるいは自殺衝動についても考えなければならない。「自殺未遂」のエピソードは父の死のはるか以前に遡る出来事である。

このエピソードに関して、Donadey は、何度かフィクションの中に紛れ込む形で書かれてきたのが、喪の書である『父の家に居場所もなく』に至ってついに自伝として書かれたのだと解釈している。しかし、『父の家に居場所もなく』が、ジェバルの生前発表の作品中、最も自伝的要素が強いのは確かであるとしても、作者はあくまで「小説」と明記して発表していることは無視できない。また、この「行為」について記述が際限なく繰り返される中で、ある種の「フィクション化」が起こっていることが指摘できるのではないだろうか。1953年の10月という現実的日付まで付されているこの出来事は、午前中にカフェで三人で会った後、散歩に出てしばらく後に起こったはずである。「行為」の記述が始まる第3部第10章直後の第11章のタイトルは「あの朝」であり、「朝(matin)」は午前中全体を指示しうる言葉である。この単語も何度も繰り返されるが、エピソードの3章に至ると、「あなたはついに1953年10月のあの夜明け(aube)に戻ってきた(NP394)」と変化する。「夜明け」は、ジェバルにおいて、単に「朝」の言い換えにすぎない単語ではない。『愛、ファンタジア』の冒頭には、2ページと数行の導入部ともいえるテキストがおかれているのだが、それは、本論でも言及した父と手をつないで初登校する少女で始まり、例外的な育ち方をする少女や彼女をとりまく社会についての簡潔な記述を含んでいる。見知らぬ男性から届いた手紙を父が破り捨てるというエピソードもすでにここに書かれ、父に与えられた言葉の読み書き能力によって、禁じられた恋愛物語が始まったことへの言及もある。そして、その導入部を締めくくる最後の独立した1行の文が「娘の手を取って、私は夜明けに出発した<sup>54</sup>」であり、原文では最後の単語は《aube》である。この直後にフランスのアルジェリア侵攻開始を語る第1章が始まるのだが、その冒頭の単語は、あたかも前ページの末尾を引き継いだかのように《aube》なのである（「1830年6月13日の夜明け<sup>55</sup>」）。

<sup>53</sup> 石川美子『自伝の時間』、中央公論社、1997年、第5章、pp.101～115。

<sup>54</sup> Djébar, *L' amour, la fantasia*, p.13. ここでは、「私」が離婚し、娘と新しい人生を始めようとしていることが暗示されている。

<sup>55</sup> *ibid.*, p.14.

「夜明け」は、何らかの決定的な出来事の到来を暗示する重要な語であるように思われる。(しかも、父に手を取られて学校へ行き始めた少女が、今度は自分の娘の手を取って出発するという二つのシーンを対照させるならば、ここで娘は父に成り代わっていると言うことができる。)『父の家に居場所もなく』の「自殺未遂事件」も、際限なく繰り返されるエクリチュールの中で、自伝的な意味での一つの出来事を越える何か、に変貌を遂げているのではないだろうか。

「行為」が、自伝的要素の一つとしてテキストの中に安定した位置を獲得するのが難しいことは、この夥しい繰り返し自体、語り直し自体に表れている。それだけではない。駆け下りる疾走が始まる時点で (NP356) まず用いられるのは主語のない動詞の形 (不定法) での「走ること (courir)」である。そして、この後に続く4ページは、各ページに数行しか印刷されていないのだが、1ページごとに語りの主語が交替する。357ページで階段を駆け下りるのは「彼女」であり、358ページで電車に飛び込むのは「私」、359ページで電車の下から引き出され、失神から目覚めるのは「彼女」、360ページでその時のことを思い出すのは「私」である。この、主語の不安定もまた、この「行為」を語ることの困難を示唆しているのではないだろうか。「彼女」を主語とし、「私」の外にあるものとする視点を保たない限り書けない何か、フィクション化を必要とする何かがある。

この「行為」は、近親相姦的欲望からの逃走でもあるだろう。父のそれからの、ではなく、自らの欲望からの。だが、それだけではない。本論第2章で指摘したように、自転車のエピソードに見られる、父の近親相姦的欲望の娘による「発見」は彼女に深い傷を与えた。小説最終部に表れるのは、この欲望に対応するものを自らの内に「発見」した娘の側の反応ではないだろうか。それを逃れようとするなら自らを消滅させるしかない、という無意識の強迫的反応を、この終わらない終わりが指し示す。さらに、この逃走を書く試みは、最初に疾走へと押しやったその欲望自体を越え、死への欲動そのもの、生の根底にある死への欲望自体をむき出しにしてしまうのではないか。作家が、その欲動を何とか書こうとする時、そのエクリチュールは際限なく繰り返されざるを得ない。なぜなら、生ある限り、ついには死への欲動から解放されることはないからだ。あるいは、書こうとして書けないから繰り返す、という以上に、書きたくないのに書かずにいられない、そうした強迫的エクリチュールの衝動こそ、『父の家に居場所もなく』の終わらない終わりが指し示しているものなのではないか。ジェバル最後のエクリチュールは、読む者を、ついにはこの地点まで連れて行ってしまふのである。

## おわりに

ジェバールは、アルジェリア女性を書く作家である。彼女と同世代、またはそれ以前の世代の女性たちが、公に流通する言葉を持つことが困難であったという歴史的状況の中、父によって与えられた「他者」の言葉によって、語れない女性たちに寄り添い、その「声」となって書く作家であるとみなされてきたし、それ自体は間違っていないだろう。ポストコロニアル作家の使命に忠実な作家。『父の家に居場所もなく』のエピローグ第3章でこの小説の書き手と自認する語り手は、自らを「他所の声たちにとりつかれた女 (NP393)」と呼ぶ。この「声たち」とはアルジェリアの女性たちのそれである。しかし、その女たちがいるのは、作家にとって他の場所《ailleurs》に他ならない。言い換えれば、この作家は、父の場から遠く離れ、父の家に居場所もなく、自分に向かって「今後あなたはどこの者でもない (NP395)」と言わざるを得ない存在でもあった。

『父の家に居場所もなく』の後書きでジェバールは、「50年のエクリチュールという長いトンネル (NP401)」と記している。その果てにあるのが「自らのヴェールを取り去る行為<sup>56</sup>の最初の一步 (NP402)」たるこの小説だというのである。しかもこれを書くのは、「自己暴露したいという強迫的欲望でも、自伝—西洋文学における「世俗化された」告白の代用品—につきまといわれている (NP402)」からでもない。ジェバールによれば、西洋的告白型自伝に対し、アラブ文学の系譜においては、自己についての書き物は、知的、精神的過程の記述になる。では、彼女自身についてはどうかと言えば、自己について書くことは必ずしも「強いられたもの (NP402)」ではないと言う。ところがその直後、「突然 (NP402)」また例の「行為」の記述が表れ、「《海まで走る女》にどんな激しい衝動が住み着いたのか (NP402)」と自問する文が続くのである。生ある限り走り続ける、書き続けることを「強いられて」いることを告げ知らせるかのように。その後の数ページ、このテキストが物理的に終わるまで、「逃げ去るエクリチュール」という副題をも持つこの後書きにおいては、書くことと自己との関係を何とか跡づけようとする、複雑な、行きつ戻りつの文章が重ねられるのだが、この部分の考察には別の論考が必要であろう。

父の遺産を引き継ぐことのかなわなかった娘 (ファーティマ) を、何よりも父の言葉を引き継ぐ者として書いたジェバールは、自身、書くことすなわち父の言葉を引き継ぐことを意味する存在であった。母の言葉の系譜からの「逸脱」の意識は、常にこの作家につきまとうが、父の言葉によって、アルジェリア女

<sup>56</sup> 《autodévoilement》

性たちの声を世界に伝えるという「使命」がその仕事を支えてきた。しかし、その使命によっても、長いキャリアによっても書くことのできなかつた、あるいは、書きたくなかつた死の欲動が最晩年のテキストの最後に噴出する。もちろん、だからといって「50年のエクリチュール」の全てが『父の家に居場所もなく』に収斂するわけではない。「父の娘」は、確かに書いた。ファーティマがなり得なかつた「書記」に、はるか後代の「妹」は、娘もそうなり得ることを、しかも、単に父の言葉を書き取るのではなく、自らの言葉を、あるいは姉妹たちの言葉を書く「書記」になり得ることを立証した。その仕事は、「使命」の枠をも越えていく。「書記」は「作家」になる。ただ、それは、エクリチュールによって自らの欲動と格闘することをも意味した。この作家は、従って、死に至るまで、海に至るまで、終わることのできないエクリチュールという疾走を続けたのである。

#### 本論で言及した Assia Djébar の作品

*Les Impatients*, Julliard, 1958.

*Les alouettes naïves*, Julliard, 1967.

*L'amour, la fantasia*, J.-C. Lattès, 1985.

*Ombre sultane*, J.-C. Lattès, 1987.

*Loin de Médine*, Albin Michel, 1991.

*Vaste est la prison*, Albin Michel, 1995.

*Les nuits de Strasbourg*, Actes Sud, 1997.

*Ces voix qui m'assiègent*, Albin Michel, 1999.

*Nulle part dans la maison de mon père*, Fayard, 2007.

#### 参考文献

Zineb Ali-Benali, « Écrire en palimpseste : *Loin de Médine*, aux sources de la première fracture », in sld. N.Redouane et Y. Bénayoun-Szmidt, *Assia Djébar*, L'Harmattan, 2008.

Beida Chikhi, *Assia Djébar, Histoires et fantaisies*, Presse de l'Université Paris-Sorbonne, 2007.

Anne Donadey, « L'expression littéraire de la transmission du traumatisme dans *La femme sans sépulture*, d'Assia Djébar », in éd. W.Asholt, M. Calle-Gruber et D.Combe, *Assia Djébar littérature et transmission*, Presse Sorbonne Nouvelle, 2010.

Fatma Haddad-Chamakh, « Les figures de Mohammed, Prophète de l'islam, dans l'œuvre littéraire d'Assia Djébar », in éd. W.Asholt, M. Calla-Gruber et D.Combe, 2010.

Najiba Regaieg, « Autobiographie et auto-analyse dans *Nulle part dans la maison de mon père de Assia Djébar* », in Sylvie Camet et Noureddine Sabri éd., *Les Nouvelles écritures du Moi dans les littératures française et francophone*, L'Harmattan, 2012.

Ernstpeter Ruhe, « Enjambements et envols. Assia Djébar échographe », in éd. W.Asholt, M. Calle-Gruber et D.Combe, 2010.

Hervé Sanson, « Mon père, cet autre. Variations autour de la figure paternelle dans l'œuvre d'Assia Djébar », in éd. W.Asholt, M. Calle-Gruber et D.Combe, 2010.

Sabah Sellah, « L'amour filial dans *Loin de Médine, d'Assia Djébar*, in sld.N.Redouane, *Les écrivains maghrébins francophones et l'Islam. Constance dans la diversité*, L'Harmattan, 2013.

ミカエル・フェリエ、「われわれは皆同じ場所にいる・・・ — カテブ・ヤシーヌ：文化の出会いの「原風景」、尾崎文太訳、三浦信孝編 『グローバル化と文化の横断』所収、中央大学出版、2008年。

石川美子、『自伝の時間』、中央公論社、1997年。

武内旬子、「小説を書く権利 アシア・ジェバール初期小説を読む」、『神戸外大論叢』、第54巻、第1号、2003年9月。

——— 「物語はなぜ進まないのか — アシア・ジェバール『墓のない女』と相続権なき作家 —」、『神戸外大論叢』、第59巻、第3号、2008年9月。

——— 「場違いな物語 — アシア・ジェバール『ストラスブールの夜』における虚空とエクリチュール —」、『神戸外大論叢』、第61巻、第1号、2010年11月。

本論は科学研究費助成事業（基盤研究B 「アラブ＝ベルベル文学の比較地域文化的研究体制の構築」代表 鶴戸聡 課題番号 26300021）の助成による成果である。

Keywords: フランス文学 マグレブ アルジェリア 女性

«La fille du père» peut-elle écrire ?  
-«Le père» et la fille qui écrit chez Assia Djebar-

TAKEUCHI Junko

Offprint from *The Kobe City University Journal*

Vol.68 No.2 (2018)